# 映像メディアの知的活用法を探る
## ——「図書館・図書館員が登場する映画」を題材として

市村省二

### はじめに

いまや映像メディアは，日常生活に深く広く浸透し，娯楽，教育，芸術，ビジネスなど，あらゆる方面において，欠くことのできない重要な存在となりつつある．

ビデオデッキの世帯普及率はすでに80%を越え，映画をはじめとする各種ビデオソフトが増加し，衛星放送，CATV によるテレビ放送の多チャンネル化が進んでいる．CG，ビデオアートなどの新しい映像制作技法が現われ，自作のソフト作りが各分野で広がり，高品位な映像を提供するハイビジョン技術も注目を集めている．

こうした，「多様化」「高度化」を志向する，映像メディアにおけるさまざまな環境の変化は，主として活字メディアに拠っていた，従来の知的活動のスタイルをも変化させる大きな可能性をもっており，その活用法については十分な研究がなされなくてはならないであろう．

小論では，「図書館・図書館員が登場する映画」を題材としながら，映像メディアの知的活用法の一例を紹介することとしたい．また，映像を資料・情報として活用していくうえでの課題と展望についてもふれてみたい．

### 1. 映像から何を読み取るか

筆者はこの間，図書館・図書館員が登場する映画のリストを作成し[1]，映画に見る図書館・図書館員のイメージについて発表してきた[2]．そして，これらは思いのほか大きな反響を得ることができた．人々の関心を集めた要因としてはさまざまなものが考えられようが，主として次のような点で，図書館員の知的好奇心を刺激したのではないかと分析している．

1) レファレンス的関心…ある事物を描いた映像を探索する方法について，具体例が示されたこと．
2) 情報学的関心…映像情報の検索や映像データベースの構築のあり方について，示唆が与えられたこと．
3) 資料・教材的関心…ある事物に対する世間のイメージを知る資料として，また，それぞれの時代・地域において，ある事物がどのように存在している（いた）かを知る教材として，映画が扱われたこと．
4) 題材的関心…題材として，最も身近でかつ関心の高い「図書館・図書館員」がとりあげられたこと．

映像メディアは，人間の視聴覚に直接訴えることから，活字に比してより大きなインパクトをもっている．メッセージとしての曖昧さをもつ反面，そこから読み取ることのできる情報量は膨大であり，研究資料としても，使い方によっては高い価値をもつものと思われる．

時代の感性をリアルに映し出してきた映画もその一つと考えられるが，近年，映画の生産・流通・消費の形態が劇的に変化しており，従来は予想もしなかった活用法が可能となっている．以下，図書館・図書館員が登場する映画を例にとって，そのことを紹介してみたい．

### 2. 主題から映画を探す

一体，映画やテレビ番組などの膨大な映像資料群の中から，ある事物が描かれている作品を探索しようとする場合，どのような方法があるだろうか．映画をとってみた場合の，考えられるいくつかのトゥールをあげておく．

映画を探す汎用的なトゥールとしては，まず，作品名やスタッフ，俳優名などから引ける各種作品・人名録が，わが国ではキネマ旬報社から出版されている．また，いま日本で見ることのできる映画を網羅した『ぴあ』『ぴあ CINEMA CLUB』もあるが，これらは一般に，特定のテーマから引けるようには作られていない．

今回の調査にあたり，たまたま，米国の MAGILL'S SURVEY OF CINEMA という映画のデータベースの存在を知り，その内容を調べてみたところ，これには，各作品についての一般的な製作データや抄録のほか，一部には評論テクストも収録されていることがわかった．

興味深いのは，このデータベースでは，それぞれのフィールドに収められたデータが，単語単位で検索可能になっていることである．図書館・図書館員が登場する映画では，抄録・評論テクストの中に library や librarian という言葉が出現する可能性は高く，こうしたデータベースは，映画を多様な角度から検索する場合の有力なトゥールになりうるものと思われる．

映画を探索するための2つめの方法として，映画リストとしての性格をもつ論文 (filmographical essay) に着目した．図書館・図書館員が登場する映画を扱ったものは，わが国でもすでにいくつか発表されており[3]，それらからも，かなりの数の作品を知ることができる．

3つめの方法として，いわゆる口コミによる情報があげられる．実用性の高いトゥールが限られている中で，この方法を軽視することはできない．映画好きの多くの図書館員の方から，上の2つの方法では探すことのできなかった貴重な情報を教えていただくことができた．

さらに，現在，新しいコミュニケーション手段として注目を集めている，パソコン通信による方法も考えられるであろう．筆者はこの方法を直接体験してはいないが，米国のある図書館員は，コンピュータ・ネットワークを通じて，図書館・図書館員が登場する映画について広く情報を求め，リスト作りをしているという[4]．

上のような方法をもとに調査を行ったところ，図書館・図書館員が登場する映画は日本で公開されたものだけでも，少なくとも130本以上にのぼることがわかった．

## 3. 現物を確認する

存在だけ知っていても，実際にその現物を見て確認しないことには研究資料とは呼べないだろう．かつて，映画を見るという行為には制約が多く，映画と観客との関係は一方的なものであった．しかしその関係は，ビデオ時代の到来により，完全に逆転したといえる．

見るものが主体として，好きな作品を好きな時間に自由に選んで見ることができるようになった．必要であれば同じところを何度も繰り返して見られるようになり，作品の複製が，法的にはともかく，技術的には容易に可能となった．これらは，研究資料としての映画を考える場合，それが活字メディアと同じように取り扱えるようになったという点で，革命的な出来事といえよう．

先の図書館・図書館員が出てくる映画については，劇場での鑑賞のほか，レンタル・ビデオソフトやテレビ放映の機会を利用することによって，知り得た作品のおよそ8割以上を実際に確認することができた．なお，公共図書館の利用も考えられたが，地理的，時間的条件を含め，制約が多かったため，この方法は見送ることとした．

## 4. 映画に見る図書館・図書館員

映画の中で，図書館・図書館員がどのように描かれているかを分析することにより，世間の人々が図書館・図書館員に対してもつイメージを読み取ることができる．以下，いくつかの統計的データによりながらそれを示す．

**表1 図書館—館種別データ**

| | 国立 | 公共 | 大学 | 学校 | その他 | 不明 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 邦画 | — | 10 | 6 | 4 | 1 | — | 21 |
| 洋画 | 6 | 42 | 14 | 6 | 13 | 2 | 83 |

注：未確認のものを除く

**表2 図書館—製作年別データ**

| | 1939以前 | 1940～49 | 1950～59 | 1960～69 | 1970～79 | 1980～89 | 1990以後 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 邦画 | 1 | — | 1 | 3 | 4 | 14 | 3 | 26 |
| 洋画 | 4 | 9 | 9 | 9 | 25 | 43 | 7 | 106 |

館種別では，邦画，洋画ともに公共図書館が描かれている割合が高い．これは，市民に身近な図書館ということを考えれば当然の結果であろう．製作年別では，時代が新しくなるにつれて，描かれる作品は増えている．カウントの対象は必ずしも網羅的なものでなく，製作本数そのものの伸びも考慮しなくてはならないが，近年，図書館の存在が社会的に評価され，日常生活と密着したものになってきていることの反映とみることもできよう．

表にはあげなかったが，場面別で調べてみると，邦画と洋画では違いがみられる．洋画では調査研究の場として図書館が描かれる割合がもっとも高いが，邦画ではそのような作品の割合は少ない．登場人物の職場として描かれている割合は邦画，洋画ともに高く，ほかに男女の出会いの場，恋のアプローチをする場，勉学の場，教養・娯楽の場などが邦画・洋画ともにあげられる．調査研究の場としての描かれ方に邦画・洋画で違いが見られるのは，日本の図書館がこの面で十分に機能を発揮していないことの現われとみることはできないだろうか．

**表3 図書館員—年齢・男女別データ（推定による）**

| | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60以上 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 邦画 | 15(12) | 2( 0) | 5( 0) | 0( 0) | 1( 0) | 23(12) |
| 洋画 | 15(11) | 10( 6) | 15(11) | 8( 6) | 8( 2) | 56(36) |

注：未確認のものを除く．かっこ内は女子を内数で示す．

図書館員についてみると，邦画では若い女性職員が描かれている割合が高いが，洋画では中堅層とみられる職員（特に女性）も，かなりの割合で登場している．これは，前に述べた，調査研究の場としての描かれ方が，邦画の場合少ないことの反映ではないかと思われる．

必ずしも一般化はできないが，描かれた図書館員の特徴的なイメージをひろってみると，知的，従順，地味，真面目，薄幸，自分の殻に閉じ込もりがち，心に鬱屈したものを抱えている，などが読み取れる（ただし，知的なイメージは邦画の場合，ほとんどない）．

こうしたイメージについては，個人の直接の図書館体験とともに，社会全体と図書館との結びつきが複雑にからまりあって形成されるものであろう．これを単に作り手の意識の問題としてとらえるべきでなく，見る人を含めた社会全体が抱くイメージの問題として，また，図書

館と社会全体との関わり方の問題として，考えることが重要ではないだろうか．こうした問題に，図書館員は決して無関心ではいられないだろう．

## 5. 娯楽のメディアから情報のメディアへ

図書館・図書館員が登場する映画を事例として，特定の事物に関する映像の探し方や，その利用法について紹介してきた．ここでは主として，映像に描かれたものの社会的イメージを読み取る例をとりあげたが，それ以外にも，各分野でさまざまな応用が考えられるだろう．

映像が娯楽のメディアから情報のメディアへと比重を移してきている中で，その活用をはかっていくためには，考えておくべき問題がいくつかあるように思われる．すでに，さまざまなところで指摘されていることではあるが[5]，最後に，それらについてふれておきたい．

### 1）検索トゥールの充実

映像資料を対象とした検索トゥールについては，その必要性が認識されていないためか，特にわが国において，充実している状況とはいいがたい．先に米国の映画データベースの存在にふれたが，これについても完全とはいいきれないだろう．前の事例では，収録範囲の問題もあるが，調査しえた132本のうち，MAGILL によって調査できたものは，全体の3割程度に過ぎない．

映像資料の検索システムを考える場合，活字資料の類推によるだけではまったく不十分である．映像資料の特性にマッチした検索の仕掛けが工夫されなくてはならない．この点で現在，関心を集めているのがマルチメディア・データベースである．90年代最大のビジネスはマルチメディアであるともいわれるが，その展開については図書館界としても注目していく必要があろう．

### 2）映像ライブラリーの整備

現状では，レンタル・ビデオ店が町のビデオ・ライブラリーといえなくもないが，図書館の機能と比較した場合，いくつか難点があるように思われる．例えば，在庫目録が公開されていないこと，有料制であること，予約ができないこと，総合目録がないことなどである．

資料・情報の自由なアクセスという点から考えれば，本来は，公共図書館がもっと整備されて，映像ライブラリーとしての役割を担っていくべきではないだろうか．昨年10月，横浜に国内初の「放送ライブラリー」がオープンしたが，こうした機関が身近に設置され，利用しやすいものになっていくことを望みたい．

なお，映像のディジタル化と搬送のための圧縮技法の開発により，将来は映像ライブラリーに行かなくても，自宅から必要とする映像に容易にアクセスできるようになる可能性が予測されている．そうした場合の図書館サービスのあり方も，今後問われることになると思われる．

### 3）自由な引用のための制度の確立

利用面についてみた場合，映像著作物が自由に引用できる制度が確立されなくてはならない．現状では，書物におけるような引用が映像の世界では非常に困難であり，この面での法整備が急がれる．著作者の権利保護はもちろん必要であるが，そのことは逆に，自由な創作活動や映像文化の発展にとって，阻害要因となりかねない．

### 4）映像リテラシーの必要性

映像の送り手と受け手の関係は曖昧になり，個人レベルでの映像の加工や，作品の創出が容易になりつつある．そのような時代にあっては，膨大な映像資料・情報の中から自分に必要とするものを収集，選択，加工し，利用できるようにしていくための，「映像リテラシー」ともいうべき新たな能力の修得が必要とされている．その点からすると，視聴覚教育を含めた学校教育のあり方も，今後，見直しを迫られることになるであろう．

## おわりに

日図協では今年，100周年記念事業の一つとして，NHKライブラリーをもとに，図書館にちなむ映像のビデオ作りを計画しているそうだが，興味深い企画といえよう．

映像メディアとそれをめぐる環境の変化は，図書館・情報サービスの役割や教育・研究のスタイル，ひいては人間の生活活動全般に影響を与える大きな潜在力をもっている．映像メディアの知的活用法を探ることは，まだまだ未開拓の領域であるように思われる．

### 注

1) 市村省二．図書館・図書館員が登場する映画と関係文献．書誌調査1991．[東京] 私立大学図書館協会東地区研究部書誌調査研究分科会，1991． p.38-45.

2) 大学図書館問題研究会第22回全国大会（1991.8.24～26：仙台）3日目の主題別交流会での発表．

3) 代表的なものとして次のものがある．
滝沢正順．劇映画に現れた図書館と図書館員に関する一考察．図書館界．Vol.39, No.5, p.195-204 (1988).
伊藤敏朗．映像表現における図書館と図書館員像に関する論考．視聴覚資料研究．Vol.2, No.3, p.120-123 (1991).

4) 学術情報センターの NACSIS-MAIL 電子掲示板「図書館職員用掲示板」の「カタロガーの部屋」における鈴木隆雄氏の書き込みによる（No.181, 204-206).

5) 例えば，次のものが参考になる．
植条則夫編著．映像学原論．京都，ミネルヴァ書房，1990. 326p.

（いちむら しょうじ：和光大学図書館）

[NDC：014.77 BSH：視聴覚資料]